SY01 シンポジウム

第1日（11月7日）　15:30～17:00

コロナ禍は社会を変えるか？

企画者：　日本社会心理学会第61回大会準備委員会
外山　みどり（学習院大学）

司会者：　伊藤　忠弘　（学習院大学）

話題提供者：　中谷内　一也（同志社大学）
松井　豊　（筑波大学）
竹村　和久　（早稲田大学）

指定討論者：　平野　浩　（学習院大学）

概要

2020年初頭から始まり，急速に世界中に広まった新型コロナウィルス感染症は，社会のさまざまな側面に多大な影響を与えている。当初は，数か月で収束に向かうと予想され，短期間の不自由な生活を乗り越えれば，以前の状態に戻れるのではないかという希望的観測もあったものの，夏を過ぎ，秋になっても，世界の感染者数は減少に転ずることなく，日本国内でも，収束がいつになるか予測がつかない状況となっている。日本においては，欧米諸国のような厳しいロックダウンは免れたものの，外出の自粛や在宅勤務が呼びかけられ，対人間の距離をとること，密集しないこと，対面場面では大きな声で会話しないことなどが重要であるとされている。そしてこのような状況が一時的な緊急事態に終わるのではなく，ここで変化した行動パターンが，「新しい生活様式」として今後も継続し，定着する可能性が出てきている。

新型コロナウィルスへの対応は，人間の行動様式，職場での働き方や生産の方式，そしてさらには社会のあり方を変えるのであろうか？この状況では，1人1人の行動が社会全体の動向を左右するという側面と，国や地方自治体から出される指示や要請が個々人を規制するという側面の両方が存在し，まさに社会心理学の中心課題を集約しているということもできる。

このシンポジウムでは，新型コロナウィルス感染拡大に伴って，現在までに表面化し，顕在化した諸現象や諸問題を議論するとともに，今後も続く感染症への対応として，あるいは社会的な危機場面一般への対応として，どのような注意や考慮が必要かを検討することとしたい。

WS01 ワークショップ

第2日（11月8日） 10:30～12:00

人・社会・科学技術のあるべき関係を求めて：ELSI 研究と社会心理学

企画者： 唐沢 かおり（東京大学）

司会者： 唐沢 かおり（東京大学）

話題提供者： 唐沢 かおり（東京大学）
濱田 志穂 （JST・RISTEX 非会員）
小林 傳司 （大阪大学 CO デザインセンター 非会員）

指定討論者： 浦 光博 （追手門学院大学）
戸田山 和久（名古屋大学）

概要

科学技術の進展は人と社会のあり方に大きな影響を与えている。新しい知や恩恵をもたらし，豊かな社会を実現することに貢献してきた一方で，人類の歴史にとって不可逆的な破壊をもたらす可能性も論じられている。そのような中，ELSI（Ethical, Legal, and Social Issues）や RRI（Responsible Research and Innovation）というキーワードの元，学際的な議論を進める必要が，産・学・官の各レベルで認識され，研究プログラムが立ち上がり，また，そのことを専門的に論じる人材を育成する拠点も出来つつある。

人と社会との関係を論じてきた社会心理学は，このような動向に大きな貢献をなし得るポテンシャルを持ち，他分野からの期待も大きい。しかし，ELSI/RRI という言葉や概念が多くの社会心理学者にとってはなじみがない状況にあること，さらには，我々が持つ知見や方法論が，他分野との協働研究の中で健全に用いられる必要があることを踏まえると，ELSI/RRI とは何か，また，この概念を巡る議論の歴史や関連する動向について，社会心理学コミュニティが理解したうえで，議論を深める必要があるだろう。

本 WS はそのような現状を踏まえ，ELSI/RRI を巡る学術的動向や「官・産」における動向，ELSI/RRI 研究に社会心理学が携わることで生まれる新たな展開，知見・方法論の用いられ方に関する問題点，企画者が関わるプログラムでの具体的なファンディングの可能性の紹介などを中心に，話題提供を行う。また，指定討論では，提示された論点について，批判的な検討を行う。これらを通して，社会心理学が「人・社会・科学技術のあるべき関係」に関する議論にどう関わり貢献していくのか，その可能性を探っていきたい。

本 WS は JST RISTEX（国立発研究開法人科学技術振興機構 社会技術研究開発センター）との共催のもとに行われる。

RISTEX は，21 世紀の人類・社会が直面する問題に，自然科学と人文・社会科学の知識を活用して取り組む研究開発プログラムの推進をミッションとしている。詳しくは https://www.jst.go.jp/ristex/を参照。

WS02 ワークショップ　第2日（11月8日） 13:00～14:30

ネクスト社会神経科学：個と社会環境のダイナミクス

企画者：　高岸　治人（玉川大学）
　　塚本　早織（愛知学院大学）

司会者：　塚本　早織（愛知学院大学）

話題提供者：　赤石　れい（理化学研究所　非会員）
　　西谷　正太（福井大学　非会員）
　　森口　佑介（京都大学　非会員）

指定討論者：　結城　雅樹（北海道大学）

概要

社会神経科学はヒトの社会性に関する生物学的な基盤 (脳や遺伝子の働き) を明らかにする学問であり，ここ 20 年の間で膨大な研究が蓄積されてきた。しかしながら，多くの研究は個が社会に対して示す認知や行動に焦点が当てられており，社会心理学者が重視してきた個と社会のダイナミクスについてはこれまでほとんど議論が交わされることがなかった。ヒトが示す社会行動は置かれた社会環境によってダイナミックに変動していき，そして，その社会行動は社会を再構成する。そのような個と社会のダイナミクスという視点にたった新しい社会神経科学を構築していくのが，社会心理学者としての責務であると考える。

そこで本ワークショップではその第一歩として，社会から個への関係性に注目する。3 名の新進気鋭の研究者の方々から社会環境がヒトの社会性にどのような影響を与えるのか社会神経科学的なアプローチを用いた研究を紹介していただく。その中で個と社会のダイナミクスを踏まえた次世代の社会神経科学の構築のために何が必要かを議論していくことを目的とした。

まず赤石れい氏には，採餌理論における探索 (Exploration) と深化 (Exploitation) の概念を取り入れた社会環境変動を伴った意思決定について脳機能ネットワークを調べた研究について報告してもらう。

続いて西谷正太氏には，社会環境によるヒトの社会性への影響について，近年注目されている DNA メチル化解析を用いた研究について報告してもらう。

さらに森口佑介氏には，子どもの認知機能と前頭葉機能の発達について，社会環境による影響を検討した研究について報告してもらう。

最後に，北海道大学の結城雅樹氏に，社会心理学者の立場から，個と社会環境のダイナミクスという視点に立った新しい社会神経科学に期待する点，そして注目すべき重要な問題について議論していただく。